



貝殻山貝塚

弥生時代前期

貝殻山は、地元の人びとの間では、古くから貝塚として認識されてきた。昭和4年に最初の発掘が行われ、この地点を最初に調査した加藤務は、「貝殻山と呼ばれる小山を中心に其の附近の畑一帯一畝に渡って三尺乃至一丈餘の厚さの貝層が扱っている」と記している。貝塚からは、ハマグリ、カキ、シジミなどの貝殻とともに、弥生時代前期の遠賀川系土器を主体とする遺物が出土している。このエリアは、弥生時代の朝日遺跡のなかでもっとも古く、最初に人びとが住みはじめた集落としての出発点であった。

昭和46年12月に、初期弥生文化が伝播した東端の様相を示す遺跡として、貝殻山貝塚を含む10169m²が国史跡に指定された。

貝殻山貝塚(昭和46年)



◀ 弥生時代前期の貝層



◀ 貝層から出土した貝

平成7・8年度の発掘調査では、史跡隣接地で環濠とみられる弥生時代前期の溝がみついている。この溝は幅2.5～4.5mの断面が箱形の環濠で、史跡指定地の南側をかこむようにめぐっている。この環濠にはカキ、ハマグリなどの貝殻が厚く堆積し、弥生時代前期から中期初頭の土器や石器が出土した。貝殻山貝塚周辺の前期弥生集落は、弥生時代の象徴ともいえる環濠集落として成立したことが判明したのである。

貝殻山貝塚(昭和46年)



朝日遺跡のほぼ中央に位置する塚状の遺構である。

弥生時代中期から後期の貝塚として、昭和43年11月に貝殻山とともに国史跡に指定されている。その後、環状二号線の建設にともない塚の周辺を発掘調査したところ、塚を囲む二重の周溝が確認された。周辺から須恵器や埴輪片が出土しており、現在では5世後半から6世紀初め頃の円墳ではないかと考えられている。弥生時代の集落終焉後の朝日遺跡の様子を伝える遺構である。

検見塚は現在も清洲ジャンクションのなかに保存されているが、道路に囲まれ直接墳丘部分に訪れることはできなくなっている。